

1993年末～94年始 毛沢東の故居(湖南省^{しゅうたん}湘潭市^{しゅうざん}韶山市)を訪ねて

まず、今回の旅行の日程と宿泊地をあげる。

12月25日 上海→長沙 車中泊
26日 長沙 芙蓉賓館 222元
27日 韶山 韶山賓館 104元
28日 長沙 芙蓉賓館 222元

12月29日 長沙 芙蓉賓館 222元
30日 長沙→上海(飛行機) 中亜飯店 314元
31日 南京 玄武飯店 385元
1月1日 南京 玄武飯店 385元
2日 上海 中亜飯店 314元

参考にホテル名と宿泊費を入れた。長沙の芙蓉賓館と南京の玄武飯店は三ツ星、上海の中亜飯店は二ツ星、韶山の韶山賓館は招待所(関係者向けの宿泊施設。出張の時などに利用されることが多い。同行の王さんが大学の教授なので利用できた)なので安い。中国のホテルは、ほとんどがツインで、一人でも二人でも同じ宿泊費だ。この度の旅行、30日までは王さんと一緒に、その後は私一人の宿泊である。全て食費は別。レートは、一元が約20円。公式には、94年1月1日から一元が約13円に切り下げられた。

【我不能吃辣的!(私、辛いのが駄目なんです!)]

1992年の年末から93年の年始にかけて、中国の友人王さんと太平天国の故地を訪ねる旅をしたが、丁度一年後、また、王さんと毛沢東の故居を訪ねる旅をすることになった。

上海見物もそこそこに、上海駅に帰って来て長沙行の夜行列車に乗る。

湖南省の省都長沙行きの急行寝台は、17時50分定刻に発車した。1200キロ、26時間の旅である。上海を出るとすぐに弁当売りが来る。私たちは牛肉弁当を買う。中国定番の発泡スチロールの容器に入った弁当である。蓋を取ると、ご飯の上に牛肉のピーマン炒めのようなものが乗っている(青椒肉絲?)。

「かーっ!」私は一口食べて、その辛さに思わず吐き出してしまう。

「この列車の料理人は湖南人だと、さっきの弁当売りが言っていました。湖南省の料理は中国一辛いことで有名です」

と、中国人の王さんも辛そうだ。

ピーマンの他に赤い唐辛子がたっぷり入っており、これが無茶苦茶辛いので、それだけは除けて食べるがそれでも辛い。あまりの辛さに備え付けのポットの湯を飲むと、唐辛子と熱い湯とで口の中は火が付いたよう。私は半分も食べずに残してしまう。王さんもだいぶ残していた。

軟臥車は四人で一つのコンパートメントで、他の二人は山東省の青島に詰める海軍軍人と名乗る二人連れだ。

昨年、柳州から杭州まで乗った軟臥車の他の二人は、初老の元共産党幹部とその奥さんで、話がはずみ、三日後に二人の家を訪問するという打ち解けようだった。しかし、今回の二人は堅物でどうも窮屈だ。

話の糸口が見つからず、前の二人をただじっと見

ていた王さんが、海軍軍人の服のボタンを指さして、「星印のなかに八一、これが軍の印です」

海軍軍人も王さんの話に合わせて、にっこり笑いながらボタンを私の方に向けてくれる。「なかなかやさしいところあるやんか」、と思いながら、

「確か、八月一日は建軍記念日でしたねえ。これは何の日ですか」と質問する。「1927年8月1日、南昌起義の日です」と王さん。

「思い出しました。4月の蒋介石による上海クーデタに対する、共産党最初の反撃でしたねえ」

「そうです。周恩来、朱徳、賀竜らの指導のもと、共産党は初めて独自の軍隊を持ったのです」

「それで建軍記念日なのですねえ」と私も理解する。



南昌八一
起義
紀念館

右は紀念館の展示写真
黄埔軍官学校政治部主任時代の
1924年11月、26歳のときの
周恩来

若くて端正で凛々しい



【「我的一九九七」】

夜行列車の徒然に、王さんに『我的一九九七』の説の分からなかったところを聞く。

この曲は、今年（93年）の5月に放映されたNHK番組『太平洋の世紀—中国の二つの顔』の最後に流れていた曲だけれど、非常に印象に残っていた。その部分を何度も見、またメロディが何とも楽しいので、ロズさめるほどになっていた。

イギリス領香港は三つの段階を経て形成された。

① 1842年、アヘン戦争の講和条約である南京条約で香港島の割譲を受け、

② 1860年、アロー戦争の講和条約である北京条約で九竜半島南端の割譲を受け、



③ 帝国主義華やかなりし1898年、九竜半島全域と付近の島嶼部を99年の期限で租借した。

1997年に租借の期限が来るが、1984年に調印された中英合意文書によって、租借部分だけでなく香港全域が返還されることになっている。

そんな香港への憧れを歌ったのが『我的一九九七』だ。評劇（河南省の劇）の軽やかなメロディと歌手艾敬（アイチン）のさわやかな歌唱で魅力的な歌になっている。

王さんに無理を言ってテープを送ってもらった。授業中、生徒に聞かせたが大好評であった。王さんの話では、この歌は今年のはじめ中国でも流行ったということだ。

「我的一九九七」作詞・作曲・歌 艾敬

私の音楽の先生は父です

父は二十年ずっと国営工場で働いてきました

母はかつて評劇で歌っていました

彼女は時代が悪かったといつもぐちっています

（文化大革命の時代で、上演できなかつた）

少女の時、私は歌で表彰されたことがある

二人の妹も、私と同じようになりたいと思っています

ます

私は十七歳の時故郷の瀋陽を離れた

そこには私の夢がないと感じたから

私は一人、よく知らない北京へやってきた

そして、有名な王昆団長の東方歌舞団に入った

本当は、芸校の時代が最もなつかしい

しかし、先生たちはそうは思っていない

歌える喉によって

生活はそんなにぎりぎりではなかった

私は歌って北京から上海まで行った

そして、上海から、憧れの南方までも行った

私が広州に留まっていた期間は比較的長い

私の彼が香港にいるから

香港はいつからあるの？

香港人ってどんな人なのかなあ？

彼は瀋陽へ来られるのに、私は香港へ行けない

香港、香港その香港

侯さんは、勇気を出して香港へ来るように言う

香港、香港どうして人気があるのかな

聞くところによると、そこは崔さんの重要な市場だそう

私を華やかな世界に行かせて

出国許可の印を押して

早く来て一九九七年！

ヤオハンって一体どんなところかな

（ヤオハンとは日本資本の百貨店。一九九七年破綻）

早く来て一九九七年！

私はHONG KONGへ行ける

早く来て一九九七年！

私を香港コロシアムで歌わせて

早く来て一九九七年！

彼とナイトショーを見に行くの

早く来て一九九七年！

ヤオハンの服ってどんなのかな

早く来て一九九七年！

私は香港へ行ける



※日本語訳は編集委員

（ ）の文章は編集委員の補足

スマホの音声検索で「私のイチ キュウ キュウ ナナ」で簡単に出てきます

【毛沢東生誕百周年の韶山冲(シャオシャンチョン しょうざんちゅう)】

27日、いよいよ毛沢東の生家のある韶山へ入る日だ。長沙から韶山まで、列車で四時間かかる。朝早くホテルを出て、7時5分発の韶山行きに乗る。

列車の中には「紀念毛沢東同志誕辰一百周年」などと染め抜いた赤い横断幕が掛けられ、窓ガラスには記念のシールが貼られている。幹線から別れ、韶山への支線に入るとスピーカーから「東方紅」や「我愛北京天安門」といった毛沢東讃歌が次々流れ、乗客が合唱する。私たちの向かいの客は、日本人の私を意識してか、体を動かしリズムをとって大きな声で歌っている。王さんも小さな声で歌いだす

我愛北京天安門 天安門上太陽昇
偉大領袖毛主席 指引我們向前進

祝賀の雰囲気の高まったところで韶山着。

プラットホームや駅舎には、車内と同じように赤い横断幕が掛けられ、毛沢東讃歌が流れている。改札口を出ると駅の正面高く、毛沢東の肖像画が掲げられている（次ページに写真掲載）。

韶山駅から毛沢東の生家のある韶山冲(村の名)まではバスで半時間とかからない。毛沢東の故居へは、バス停前の池の横を小高い山の方へ登って行く。路上には、この村の主婦がたくさんのみやげ物を並べ、見学者がそれを取り囲んで毛沢東グッズを買っている。そんな道を二百メートルほど登って行くと毛沢東の故居がある。日干し煉瓦積みに瓦葺き、一部藁葺き屋根の農家で、例えば広東省花県の洪秀全の生家などと比べてずっと立派だ。

毛沢東生誕百周年の12月26日、つまり昨日は14万人の人出があったと、マイクロバスの運転手が言っていた。今日の人出はそれより少ないようだが、それでも、故居の正面の記念撮影によい場所は、順番待ちができています。

私はここに来る迄、いろんな本で毛沢東の生家の写真を見てきたが、前の池には決まって蓮の花が咲いていた。今は冬なので蓮の花はなくても、枯れた蓮の葉や茎ぐらいはあるだろう、と思っていたら、太く長い杭、杭、杭、なんと池の中一面杭だらけなのにはびっくりした。土産物屋の話では、21日にここで毛沢東生誕百周年のテレビ番組の撮影をしたが、杭はその時の足場だというのである。

今度の生誕百周年に合わせ、この村の中心広場に五、六メートルもある毛沢東の銅像ができた。この広場周辺は、三方向から村に入ってくるバス、そしてその客の乗り降りでもいつも混雑している。また、この広場は、いつ行っても爆竹の音と煙がすごい。ここで奇妙な光景を目にする、中国の太い大きな線



長沙↓韶山 車中



故居の近く 土産物売り



故居 池の中は杭、杭、杭！



新しくできた毛沢東像

香と爆竹に火を着け、凄い音と煙の中、銅像に両手を合わせている若者がいる。毛沢東は死んで、今や信仰の対象になっているのだ。この光景は、「土産物屋で買った毛沢東グッズを交通安全のお守りに、運転席に吊すのが流行っています」と言っていた王さんの話と符合する。

【韶山冲及び毛沢東故居(続き)】



毛沢東同志故居



韶山站(站は駅)



故居周辺



韶山学校の創立40周年と毛沢東生誕百年を兼ねたお祝いの行事。「韶山学校」の右上がりの字は毛沢東の筆跡



毛沢東グッズを売る店



毛氏宗祠



椅子に坐っている毛霞生さんは、一九五九年、毛沢東が韶山に帰ってきたとき、一緒に撮ったというこの写真が自慢で、今も焼き増しして、売っている。私も一枚買った



毛沢東像広場の爆竹のカス 爆竹を買って火を付け、バンバンいっている間に、毛沢東像に手を合わせ、お祈りをする

【毛沢東、滴水洞（てきすいどう）で文化大革命の想を練る】

韶山沖からバスで三十分ほどのところ、龍頭山の山懐に滴水洞と称する毛沢東の別荘がある。

1959年、人民共和国成立後初めて毛沢東が韶山に帰った時、湖南省委の書記に、

「ここは、静かな良いところです。私の引退後のために簡単な家を作ってほしい」

と言った。その言葉によってできたのが、この建物である。会議室、執務室、寝室、夫人の寝室（江青は一度も使用することがなかった）等がある。山と山の間、飛行機からは見えないように作られ、地下には、鉄扉で通路が遮断できるようになった立派な防空壕がある。

中国には、多くの都市に防空壕がある。王さんに聞くと、ソ連やアメリカからの攻撃を想定して主として60年代に作られたものだそう。昨年行った広州では地下壕のいくつか、現在地下商店街として使用されていて、私もそんな商店街でカメラを買った。

1956年、ソ連はフルシチョフの指導下に平和共存を唱え、外交政策を転換してアメリカと接近する。中国はこれを修正主義として批判する。毛沢東はこのようなソ連の社会主義に対する裏切りが我慢ならない。1964年にフルシチョフが失脚しても中ソ対立は変わらない。

1960年代中ごろ、中ソ対立が激しさを増していた頃アメリカのベトナムへの武力介入が本格化する。毛沢東はアメリカの本当の目的は中国攻撃にあるのではないかという脅威を感じていた。前面にアメリカ帝国主義、背後にソヴィエト修正主義という二つの敵に挟まれ危機感をつのらせていく。こんな状況のなかで多くの都市で地下壕が掘られたのだ。

一方、国内においては劉少奇、鄧小平など実権派が社会主義に逆行する政策を進める。社会主義中国を守るにはどうすべきであるか。

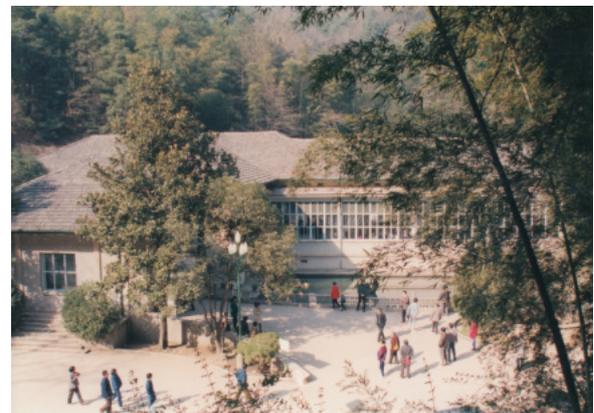
毛沢東は1966年6月17日この滴水洞に入り、十二日間共産党中央と連絡を断ち、想を練り書き物に熱中する。ここで得た彼の結論は「大衆を信頼し、大衆に依拠し、大衆の創造の意欲を尊重しなければならない。そのためには、騒ぎが起こるのを恐れてはならない」というものであった。6月28日に山を下り、文化大革命は本格化する。



滴水洞玄関付近



滴水洞玄関前 王さん



滴水洞



滴水洞

【韶峰山麓に毛沢東詩詞碑林を訪ねる】

12月27日は、銅像前広場のすぐ横の韶山賓館に泊まる。

翌28日、韶山沖から車で十五分程の韶峰山麓に、このたび開園した毛沢東詩詞碑林へ行く。

道路が狭いうえに見学者が多いので車は入山制限。タクシーがなく単車のタクシーに乗る。後の席に私と王さんの二人が一緒に跨がり、前の運転手に抱きつく。単車に三人も乗りヘルメットも被らないなど、日本では考えられないことだ。それも、混雑した道をブーブーと警笛を鳴らし、歩いている人を避けながら走るのだからかなり危険だ。

碑林は、毛沢東の詩や詞を刻んだ石碑五十ほどを韶峰の山麓に配置したものだ。紫、臙脂、深緑、黒、白、色とりどりの大理石、花崗岩をいろんな形に加工している。

工事が開園に間に合わなかったのか、今日もまだ一部工事中だ。

入ってすぐの小さな碑に、

五月七日	五月七日
民国奇耻	中国の、この上ない恥の日
何以报仇	何を以て仇に報いん
在我学子	仇に報いるのは、我ら学生

とある。五月七日は、1915年、二十一カ条の要求に関し日本政府が中華民国政府に最後通牒を通告した日。奇は普通でない、抜き出るといふ意。耻は恥。

碑林の一番高いところで、王さんが列車の中で話してくれた詩を見つける。

七律答友人

九嶷山上白雲飛	九嶷山上白雲飛び
帝子乗風下翠微	帝子は風に乗り下り翠微かなり
班竹一枝千滴泪	班竹の一枝、千滴の泪
紅霞万朵百重衣	紅霞、万朵、百重の衣
洞庭波涌連天雪	洞庭波涌き天雪に連なる
長島人歌動地詩	長島人は歌う地を動かす詩
我欲因之夢寥廓	我之に因り夢寥廓ならんと欲す
芙蓉国里尽朝暉	芙蓉国里尽く朝暉

九嶷山は湖南省南端、広東省近くにある山。班竹は湖南省に多い竹の種類で、文字どおりまだらの模様があり、ちょうど泪のように見える。

朵は、花のひとつかたまり。花を数える助数詞。

長島は長沙を流れる湘江の中州をいう。この中州が長いので長沙という地名ができた。

寥廓とは広く大きいこと。雄大な自然を前にして、

自分の夢も大きくなるという意。

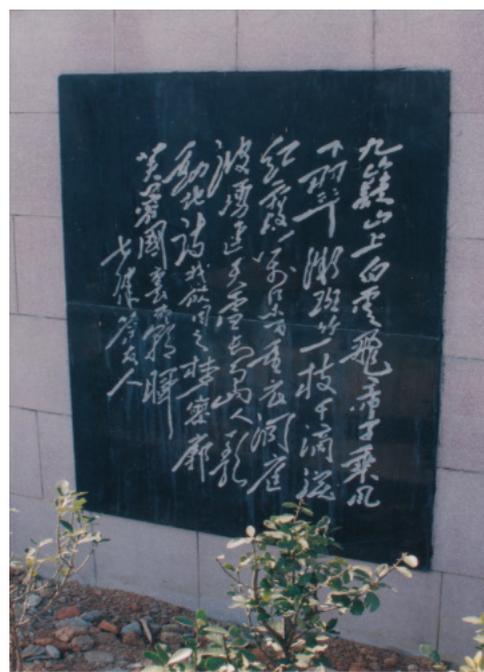
芙蓉国は湖南省の雅名。

里は何々の中という意。

朝暉は朝のかがやき。



「五月七日」の碑



「七律答友人」
毛沢東の右上がりの特徴のある字



詩林の風景

【テレビで放送された毛沢東記念番組】

王さんは、テレビ大好き人間である。ホテルに着いて部屋に入ると、まずテレビを点ける。朝起きると一番にテレビを点ける。私に見せようと、点けてくれていたのかもしれないが、そんなわけで私もよくテレビを見た。

この度の旅行中、いつテレビを点けても、どこかのチャンネルで、必ずといってよいほど毛沢東記念番組が流れていた。

12月27日、韶山賓館に泊まった時のことだ。部屋に入っていつものように、王さんがテレビを点けると毛沢東のベッドが映った。

アナウンサーが言っている、

「毛主席は寝ながら読書するのが習慣でした。彼のベッドは普通のベッドより幅が広いのですが、ベッドの三分の二は本の置場になっていました」

ここで、毛沢東の眼鏡がアップで映る。それも、耳に掛ける柄の片方がない眼鏡が。

アナウンサーが続けて言う、

「毛主席は横になったまま何時間も読書をしました。だから右肩を下にして横になっても、左肩を下にして横になっても、眼鏡の柄の片方が邪魔になるのです。それで、右の柄のない眼鏡と左の柄のない眼鏡の両方を持っていたのです」

こんどは、翌28日、長沙の芙蓉賓館でのことだ。

「橘さん、橘さん、この人！この人！見て！見て！」

と、王さんがテレビを見ながら叫ぶので私も覗くと、お婆さんが歌っている。日本で言うと、淡谷のり子がナツメロを歌っているようなものだ。

「これが王昆です。艾敬の『我的一九九七』の中に出てきた東方歌舞団の団長の王昆です。これが郭蘭英です。二人とも延安時代からの歌手です」



1981年 王昆(右)と郭蘭英
王昆(1925年-2014年) 第一代“白毛女”



私たちが泊った韶山賓館

「延安時代という、1936年から46年までの十年間ですね。蒋介石の国民党に追われ瑞金を放棄し、長征の後、延安を共産党の根拠地にした時期ですね」

「そうです、この時代に王昆も郭蘭英も毛沢東の三番目の奥さんになる江青もやって来たのです。そして延安の人々に歌を聞かせ、劇を見せたのです」

アメリカ人記者、エドガー・スノーの『中国の赤い星』の出版という貢献もあって、延安は中国の愛国的青年男女のメッカとなった。全国各地から何千何万という人々が、日本軍の封鎖を突破して延安に集まり、教育と訓練を受けまた各地に派遣されていった。

延安はハーモニカの穴のように黄土層の山腹に掘り込まれた洞窟式住居で有名であるが、黄色い土ほこりの町に、抗日軍政大学、延安女子大学、魯迅芸術学院などいくつかの学校が作られた。これらは、教室、宿舎を自分たちで作ることから始める自力更正の学校であった。

江青は愛国的な教宣劇団に加わり、上海を皮切りに武漢、重慶と旅まわりをして1938年延安入りした。延安では魯迅芸術学院に入学、前線慰問の劇団員として訓練を受けた。当時26歳であった。延安入りして一年もしないうちに45歳の毛沢東と結婚する。当時、毛沢東は既に賀子珍と離婚していたとする説もあるが、

「毛沢東は江青と結婚したいので、賀子珍をモスクワへ追いやったのです」

と、王さんは憤慨して言う。

王さんは、こういう品格の点では、周恩来を高く評価する。

「周恩来は、夫人鄧穎超との間に子供がなく、革命に殉じた烈士の子供を何人も養子として育てました。李鵬首相もその一人です」

【毛沢東が学んだ湖南省立第一師範学校】

12月30日、いよいよ上海へ帰る日だ。

夜の飛行機なので随分時間がある。

午前中、毛沢東が学んだ湖南省立第一師範学校の見学をする。

毛沢東の最初の妻、楊開慧^{ようかいけい}の話をしてしよう。

楊開慧との結婚は、毛沢東がこの学校に学んだことと大いに関係がある。以下はG・パローツィ＝ホルヴァートの『毛沢東伝』からの引用。

「(長沙の)師範学校の最初の年(1913年、毛沢東21歳)に毛沢東にもっとも強い感化を与えた教師は、エジンバラ大学で哲学の学士号をとった楊昌済であった。楊教授は、優秀な生徒の何人かを食事と長い会話のために彼の家へ招くことを習慣にしていた。毛沢東はまもなくこのサークルの一員になった。生徒たちは、楊教授宅のテーブルについて、楊夫人が用意してくれた上等の料理を食べながら、教授の娘の美しさに深く魅了された。教授の娘は小柄できゃしゃなタイプであり、可愛らしい顔の真珠のように白い肌の少女だった。(中略)

毛沢東は1920年(通説では、1921年、毛沢東29歳の時)、以前の教授の娘である楊開慧と結婚した。彼の学生仲間みなこの結婚を理想的な現代のロマンスだと話し合った。楊開慧は可愛らしい少女であるばかりか、真の革命的同志でもあり、夫の友人たちとあらゆる主義について議論することができ、また、ほとんどの活動に参加した」

次に、エドガー・スノー著『中国の赤い星』より引用し、楊開慧の最期について述べよう。

「私の名前は湖南農民の間に知れわたっていましたが、それは生死にかかわらず私の逮捕には高額の賞金がかけていたからです。湘潭にある私の土地は国民党に没収されました。妻と妹、二人の弟毛沢民と毛沢覃の妻たち、それに私の息子たちはみな何鍵(軍閥の省長)によって逮捕されました。妻(楊開慧)と妹(沢洪)は処刑されました。他の者は後に釈放されました」

長沙市を湘江という大きな川が流れている。湘江は洞庭湖を経て長江につながる。

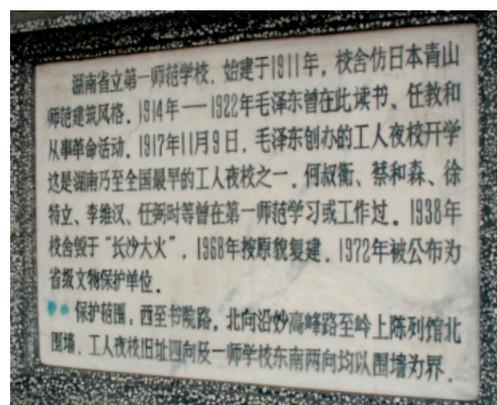
この湘江は、ちょうど長沙市に差しかかるところで五キロに及ぶ長い洲を作っている。長沙の名もここから来ている。

この洲を橘子洲(ジツツォウ)といい、市民の憩いの場となっている。特に夏は水泳場として賑わうということだ。毛沢東が水泳が達人なのは、長沙の湖南第一師範学校の時代、友人とよくこの洲で泳いだからだそう。



湖南省立第一師範学校

校門横の標識。日本の青山師範をモデルにした。一九三八年の長沙大火で校舎は全焼し、一九六八年再建された



毛沢東的座位(毛沢東の座席)



黄興(1874-1916)は清末民国初期の革命家。長沙の人

【馬王堆漢墓(解剖できる二千年前の屍体)見学】

12月29日、早朝から馬王堆へ行く。馬王堆漢墓は長沙市の北東部にある。長沙に行くならぜひ馬王堆にも、と思っていた。タクシーは、湖南省馬王堆療養院と表示のある建物に入って行って、中の広場に止まった。広場の後の木の茂った小さな丘が馬王堆であった。



馬王堆漢墓は、前漢（前202～後8）の初期、諸侯の一つであった長沙王の丞相（臣下の最高位。今の総理大臣より権限があった）及びその妻子の墓で、三つの墓からなる。

1972年から74年にかけて発掘され、特に一号墓からは三千点を越す副葬品と共に完全に整った夫人の遺体が発見された。発掘されたとき、四肢の関節が動かせるほど遺体の保存状態は良好で、一躍世界的に有名になった。

丘を登りきったところにある平屋の建物に入っていくと、そこが発掘現場で、鉄柵の向こうに、土や埋葬品を取り去ったむき出しの墓がぱっくり口を開けている。世界史の資料集に出ている殷墟（確認されている中国最古の王朝である殷の都の墟）の図そのままである。

ここはそれだけで、それ以上の見る物もないので長沙の市街へ引き返す。湖南省博物館の横に、馬王堆漢墓陳列館が別があり、ここに副葬品や丞相夫人の屍体が展示されている。

馬王堆漢墓陳列館の参観料外国人三十元（約600円）は異常に高い。それだけの値打ちがあるということか。

券売所で「荷物の持ち込みは禁止」というのでリュックを預ける。入り口へ行くと、ビニール袋を二つ呉れる。靴の埃避けである。埃をシャットアウトし、温度・湿度を調節し、非常に厳

しく管理されている。中に入って、展示されている副葬品の素晴らしさに目を見張る。

帛畫（絹の布に描いた絵）、漆器（酒器、櫃、盤、杯、食器、化粧箱）、博具（賭博の用具）、瑟（琴に似た楽器）、帛書（絹の布に書いた周易や六十四卦）、干支表、地形図、駐軍図、天文氣象雜占図（美しく、見て楽しい）等々、とても二千年以上の時間が経っているとは信じられない。特に、漆絵の鮮やかさに目を見張る。

「この時代から現在まで、二千年間の中国の発展はごく僅かです」と王さん。

順路の矢印に従って地下に降りると、そこは丞相夫人の屍体の展示室になっていた。

まず、解剖の状況が図示され、解剖の所見に、「胆石症や心臓病の持病があった。瓜を食べた後死んでいるが、死因は心臓の急な発作と考えられる」とコメントされている。

地下室の中央に進むと、覗き込むようにさらに低いところに、夫人の内蔵が学校の理科室にあるアルコール漬けの標本のように展示されている。そしてその横には、夫人の屍体が横たわっている。胸から腰にかけては布が掛けられているが、顔や体の状況はよく分かる。特に、口をあぐり開けた顔の表情は何とも異様でしばし立ちすくんだ。

最後の部屋は、屍体の入っていた棺の展示場である。外の棺、中の棺、内の棺と三重になっていて、そのそれぞれが分厚い木でできており、きれいに漆絵が描かれている。

見終わって、出口の販売所で『馬王堆漢墓文物』というでっかい本を買う。丞相夫人の屍体の写真が欲しかった。その、いい写真が載っているのは350元（約七千円）もするその本しかなかった。値段もこたえたが、重さがもっとこたえた。旅行から帰って来て計ると、三・七キロあった。今度の旅行はいろいろ経緯があって、本をたくさん買うことになった。この本を含めて全部で九キロあったのには自分でもびっくりした。これでは肩がこり、体調を崩すはずだ。



【侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館】

1994年の元旦は南京で迎える。昨日上海で王さんと別れたので今日は私一人である。

去年から始めた私の中国旅行の目的は、1949年の中華人民共和国の成立までの百年の歴史を辿ることなので、この南京はぜひ来たく、それも早い機会に来たいと思っていた。

ところが日程に余裕がなく、せっかく来たのにもう明朝、帰らなければならず、きついスケジュールとなる。行きたい所、タクシーと輪タクで移動する。かなりの距離を乗っても、タクシーで20数元(500円ほど)、輪タクだと7、8元から15元迄だ。

以下、長くなるので、「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館」の参観だけを報告する。

この記念館は、南京市の南西部にあり、市の中心からは外れている。そういうこともあり、又、もともとツアーのコースには入っていないのだろう、見学者も少なく寂しい記念館だ。

輪タクの運転手が、ここだと言って降ろしてくれたが、周りを見てもそれらしき建物は無いし、見学者らしき人もいない。運転手に聞くと、ダンプや工事用の車両の駐車場の方を指さす。ダンプの合間をぬって運転手のいう方へ行くと、一番奥まったところに售票処(入場券売場)があった。售票処から記念館の入り口への鉄柵に、なにか白いものがいっぱい着いているのでよく見ると、紙で作った花が鉄柵に結び付けられている。慰霊のためと思われる。

石段を昇ったところ、入り口は二階になっているのだが、石段の正面の壁に、遇難者三十万と表示されている。



資料館に入ると、閑散としており見学者は疎らだ。館内には、南京の地図や、暴行・虐殺の写真などが一面に貼られている。

写真に添えられた説明をそのまま再現すると、「大規模な集団虐殺を展開する他、兵士、平民、老若男女、妊婦、嬰兒、和尚、尼を銃殺する、刀で切り殺す、はずかしめ殺す、埋め殺す、溺れ殺

す、焼き殺す、はては殺人競争をして楽しむ」と表現されている。

また、「裸にされている若い女性」、「輪姦後の苦痛の婦人」、「輪姦の後病気になった十六才の女性」、などと説明が付けられた写真が貼ってある。老婆を強姦している兵士の写真まである。

私の他は、ほとんどが若い中国人なんだけど、とても視線を合わせられない。

日本語での説明が多い。

この資料館を出ると、中庭が広がっている。ずうっと下り勾配で、庭中石が敷き詰められており、一番遠い角に三本の焼け朽ちた木と婦人像が立っている。私以外だれもいない庭は、何とも殺伐、寂寥の風景である。資料館とこの庭の全体が墓の形をしているという。この異様な光景に接し、息苦しくなる。



庭の端に、ぐるっと歩道があり、これを歩いていくと周囲の壁面には、うしろ手に縛られた首の無い人、ばらばらになった手・足・腕・首、連行される集団、泣き叫ぶ子供、両手で胸を押さえるなだれる裸の女性などのレリーフが刻まれ、ピカソのゲルニカを連想させる。



庭の角の婦人像は、両足をぐっと踏張り、右手を胸に当て、左手を斜め前に出し、上半身を左へひねり、目はきつと前方を見つめている。

その視線はどこを見ているのだろうか。殺戮のなか肉親を探しているのか、加害者日本人への詰問か、さらには、人類平和の希求か。